

理工学メディアセンターが開催するセミナーの役割 - 英語論文の書き方セミナーを通して -

おかわ もえ
小川 萌
(理工学メディアセンター)

1 はじめに

理工学メディアセンター(以下「理工」とする)は、理工学部の3,4年生と理工学研究科の大学院生が学ぶ矢上キャンパス(以下「矢上」とする)に位置し、理工学分野の専門図書館として国内でも有数の蔵書数を誇っている。職員は教員・学生の研究・教育・学習活動を支えるため、電子的資料の積極的な導入や、図書館サービス・データベースの使い方を中心としたセミナーを行っている。自然科学全般を扱う基本的なデータベース等は文系出身者が多い我々職員でも説明できる一方、化学など特定の分野に特化したデータベースや、研究活動の中で避けては通れない英語論文に関するセミナーは、職員が行うには難しい面もあり、データベースの提供会社に講師を依頼しセミナーを開催していただくことも多い。本稿ではその中でも英語論文に関するセミナーに着目し、昨年度2度開催した英語論文の書き方セミナーについて報告する。

2 企画から開催準備まで

5月に対面で、11月にWebで開催したセミナーは、どちらもクリムゾンインタラクティブ・ジャパン(以下「クリムゾン」とする)が提供する、英文校正サービスであるエナゴの協力のもと行われた。キャンパスでの研究活動が研究室単位で行われる矢上では、指導教員や博士課程の学生による指導がしっかりと行われるため、英語論文の添削も研究室内で完結してしまうことが多い印象だ。実際、セミナー開催時のアンケートでは、英文校正サービスを利用した経験のある人は、参加者の17%にとどまっていた。そのような状況の中、英文校正サービスの認知度を高めたいクリムゾンと、かねてより外部講師の協力のもと英語論文に関するセミナーも行って理工の希望が合致し、まずは5月に対面でのセミナーを開催する運びとなった。

理工での英文校正サービス提供会社によるセミナーは2012年以來の開催であり、英語論文の「投稿」やデータベースを使った「検索」ではなく、「書き方」のセミナーであるということを強調すべく、他セミナーとは違うイメージでポスターを作成し広報を行った(図1・図2)。「英語論文の書き方 英語の発想法と論文執筆の書き方」と銘打った5月のセミナーは、講師が英語論文に関する著書も多い、理化学研究所の創発物性科学研究センターの小野義正氏であったこと、また、研究室を持つ先生方へ学生にご案内いただくようアプローチをしたこともあり、当日朝の時点で予約者数は88人に上った(実際に申込フォームのアンケートでは、セミナーの存在を教員の勧めで知ったという申込者が6割近くいた)。

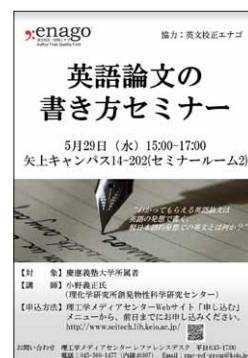


図1 5月のポスター



図2 11月のポスター

3 5月の開催

当日の実際の参加者は、計83名。他セミナーに比べて大きめの教室を用意していたが、想像以上の人の入りだった。主な対象は修士課程以上の院生を想定していたが、参加者は狙い通り修士課程の院生が最も多く半数以上を占め、次いで学部生、博士課程の院生だった(図3)。英語論文を実際に書くには少し早い学部生の参加者も多く、英語論文の書き方への強い関心が伺え、終了後のアンケートでは参加者の97%が大変参考または参考になったと回答した。セミナーの感想も好意的な意見が目立ち、2週間後に予定していたWeb of Scienceの提供元であるクラリベイト・アナリティクスによる英語論文投稿セミナーへの申込みも増加した。また、セミナー後に英文校正サービスを利用したい、と答えた参加者は8割に上り、総じて成功と言えるセミナーであった。

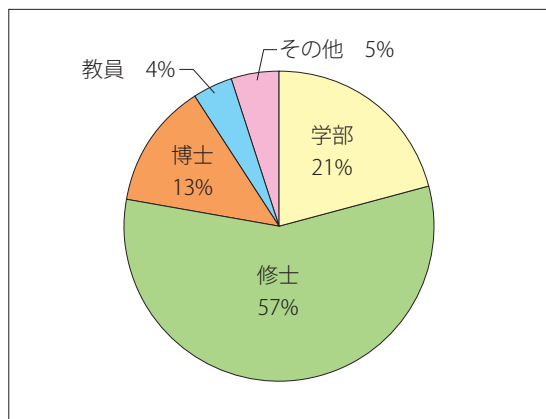


図3 参加者の内訳

4 11月の開催

11月のセミナーはオンキャンパスでの開催ではなく、エナゴで開催しているWebセミナー「英語での論文執筆をマスターする」を、館内の学習エリアにて大型テレビで中継する形での開催となった。Webセミナーを積極的に利用してもらうべく、理工では初となるコーヒーサービス付きのセミナーとなった。普段は飲食禁止の館内で、特別にセミナー用に席を集めた場所のみプラスチックカップで飲み物を提供する、という形にしたため、周りで通常通り席を利用している学生への影響が懸念されたが、実際には何の問題もなく、セミナーは滞りなく進められた。今回の講師は中央大学理工学部物理学科の田口善弘教授で、こちらも理工の学生にとっては魅

力的だったと思われる。しかし、学習エリアに集まらなくても自身のパソコンでも視聴可能、また対面と違い配布資料もないということで、5月と比べ参加者はぐっと減ってしまい、参加者の満足度もあまり高い評価は得られなかった。

5 考察とまとめ

二度にわたるセミナーの感想を見ると、どちらのセミナーも「よく使う流れやフレーズをもっと知りたい」「頻出する定型文を知りたい」という具体的な例への要望が多く、学生が英語論文を書くこといかに苦勞しているかが伺える。もちろん英語論文を中心に行われる授業は存在するが、学期期間中受講し続けなくてはならない授業は学生にとって心理的ハードルが高いのかもしれない。そういう意味では単発で開催されるセミナーは、授業の前段階の最初のきっかけとして良い役割を果たしているのではないだろうか。理工で開催される他のセミナーも、利用者のニーズの全てを満たすことは難しくとも、そのきっかけとなっていれば幸いである。

また、対面とWebという二種類の形態で開催した結果、Webセミナーの難しさが浮き彫りとなった。新型コロナウイルスの猛威で企業も大学もWebセミナーが増えているが、それでは満足できない利用者へのサポートも、今後我々職員がやるべきこととなってくるのではないだろうか。